

高校生の主体的な進路選択を促す授業実践

—専門学科における総合的な学習の時間を通じて—

M16EP012

森澤 公美子

1 研究の背景と問題の所在

高校を卒業して間もなく、就職した会社での人間関係がうまくいかない、進学した学校がやりたいことと違うなど、困難に直面している卒業生が存在してきた。その後、困難を乗り越えた者がいる一方で、すぐに進路を変更してしまった者もいた。方向転換が必ずしも悪いことではないものの、生徒が高校在学中に思い描いていたものと異なっていたのは事実である。生徒が思い描く将来と卒業後の進路とのギャップを少しでも軽減できるようにするために、高校在学中にできることは無いだろうか。そのように考えたことが教職大学院における2年間の研究を進めたきっかけである。

平成 29 年度厚生労働省発表の離職状況調査によると、新規高卒就職者の3年目までの離職率は約 40.9%にのぼる。

また平成 26 年国立教育政策研究所の調査によると、高卒就職者の離職理由について、高卒就職者は、圧倒的に「職場の人間関係」を挙げる割合が高く、「勤務地の遠さ」「仕事が面白くないこと」を理由とする者も相対的に多いことが示されている。

さらに次期学習指導要領高等学校総則改善のイメージでは、「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を充実すること」と示している。今後、学校での学びと自分の将来とを結び付けて思考する活動をさらに充実させていく必要がある。

筆者の昨年度の研究では、実践校の現状も

ふまえ、専門学科での運用を想定した進路選択を促すためのプログラムを作成した。

進路指導と学科選択

本研究は、筆者の実践校である専門学科高校生を対象として行うこととする。だが、その視野に専門学科以外の高校生をとらえることも可能な限り考慮したい。

実践校工業科は入試を一括募集で行い、1 年次前期（入学～9 月）の間は、専門学科の基礎的知識（工業技術基礎）について共通して学ぶ。その後、1 年次後期（10 月）から各 4 学科（機械工学科、電子工学科、制御工学科、環境工学科）に分かれ、卒業まで専門学科における学びを深めていく（図 1）。各 4 学科における専門的学習内容が、卒業後の就職先や進学先に大きく影響するため、1 年次における学科選択は非常に重要な要素を含んでいる。将来どのような職業に就きたいのか具体的にイメージできないまま学科を選択してしまうと、自己の進路実現に大きな障害となってしまう。自己の進路を見つめ、これからの高校生活の指針を得るためにも、1 年次前期における総合的な学習の時間を活用したプログラム実践に意義があると考え（森澤 2017）。

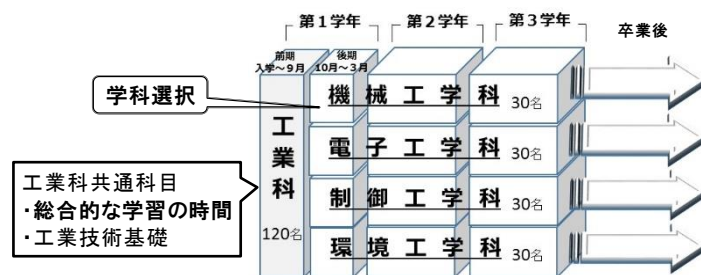


図1 実践校工業科における学科選択の流れ

2 研究の目的

本研究の目的は、総合的な学習の時間を通じたプログラムを実践することによって、専門学科の高校生の主体的な進路選択を促すことにある。

3 プログラム構成の基本方針

プログラムは、「職業適性の認識」「勤労観・職業観の醸成」という2つの分類、「a. パーソナリティ」「b. 能力」「c. 多様な進路情報」「d. 協働」「e. コミュニケーション」「f. 一般常識・マナー」という6つの観点から構成される。

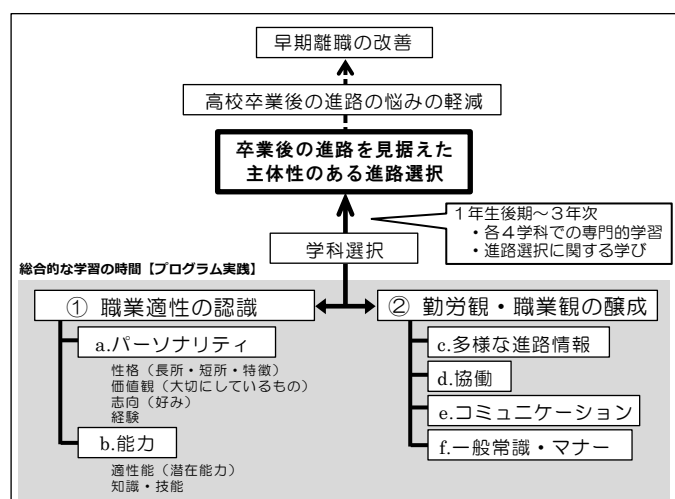


図2 プログラム実践で目指す生徒像

①「職業適性の認識」

職業適性は、その人物のパーソナリティなど、能力以外の面も含めて、個人の特性を総合的に捉えるべきものであるという認識が広まっている(厚生労働省, 2012)。自分がどのような性格であり、どのようなことに興味・関心があり、何を大切にしたいのかといった価値観を知ること、自分に適した進路選択を行うことができると考える(森澤 2017)。以上より、職業適性の認識の分類には、「a. パーソナリティ」「b. 能力」の観点を含むこととした。

職業適性の認識は、プログラム実践の序盤

(4月頃)で実施することが適当であると考え、主としてプログラムユニットⅠ及びユニットⅡに導入した。

表1はプログラムを構成するユニット名、表2は実践計画である。詳細は、昨年度の報告書「専門学科における総合的な学習の時間を通じた進路探求について」(森澤 2017)を参照されたい。

表1 総合的な学習の時間 プログラム 構成ユニット

Ⅰ	自己を知る
Ⅱ	進路をイメージする
Ⅲ	地域の産業を知る
Ⅳ	インターンシップ事前学習を通して働くことを考える
Ⅴ	進路に向けて課題意識をもつ(総括)

表2 プログラム実践計画

観点	活動名	ユニット名
a.	進路適性検査	Ⅰ 自己を知る
	私マップ	
	マインドマップ 自己紹介文	
a.e.	わたしのかかわり方	Ⅱ 進路をイメージする
a.c.	就職・進学を考える(就職編)	
a.c.	就職・進学を考える(進学編)	
a.	意思決定	Ⅲ 地域の産業を知る
b.	適性検査結果の見方(外部講師からのアドバイスを聞く)	
c.	産業を知る	
c.	山梨の統計	Ⅳ インターンシップ事前学習を通して働くことを考える
c.d.	地域の産業を調べる(卒業生の就職先)	
c.d.	地域の産業を調べる(卒業生の就職先)	
c.d.	地域の産業を調べる(卒業生の就職先)	Ⅴ 進路に向けて課題意識をもつ(総括)
c.d.	地域の産業を調べる(卒業生の就職先)	
c.	地域の産業を知る(クラス内発表)	
c.	これからの産業を考える	Ⅴ 進路に向けて課題意識をもつ(総括)
c.f.	インターンシップガイダンス	
c.	働くとは	
d.e.	協働について	Ⅴ 進路に向けて課題意識をもつ(総括)
f.	ビジネスマナー(身だしなみ・敬語・電話のかけ方)	
b.c.	視点を変える	
d.e.	協働について②	Ⅴ 進路に向けて課題意識をもつ(総括)
a.	希望する進路につくには(成績を確認する)	
	進路探求まとめ	

②「勤労観・職業観の醸成」

昨年度筆者は、様々な視点(文献調査、専門学科高校参与観察、専門学科高校教師への聞き取り調査、高卒者採用企業社員)から高校卒業前に養うべき力について検討を行った。その結果、勤労観・職業観を醸成するために、特に1年次に意識すべき項目を、本プログラムに取り入れることとした。高校に入学して

間もない生徒は、卒業後の進路をイメージすることは難しく、進路選択に関する情報量も不足している。また、高校生活ではほとんど経験しないことであっても、就職してから初めて必要とされる力もある。

例えば、協働する力である。会社では、同僚と協力して一緒に仕事を進める場面も多い。卒業してから初めてその力の必要性に気がつき行動するより、高校1年次から意識していくことによって、円滑な職業生活を送ることができる。特に、昨年度の専門学科高校における参与観察実習を通して、班で協力し課題を解決する力を養うための視点を得ることができた。以上、昨年度からの検討を踏まえ、勤労観・職業観の醸成の分類には、「c.多様な進路情報」「d.協働」「e.コミュニケーション」「f.一般常識・マナー」の観点を含むこととした。勤労観・職業観の醸成は、自分の「a.パーソナリティ」「b.能力」を把握した上で考察していくことが適当である。よってプログラムユニットの中盤以降(5月以降)に導入した。

4 研究の方法

対象者：山梨県立 A 高等学校工業科1年生
4クラス 計112名(男子104名,女子8名)
実施期間：4月～9月 週2時間
授業担当教員：各クラス2名(計8名)
プログラムの検証方法：2つ分類(6つの観点)からプログラムの効果を検証する。見取り方法は、質問紙調査、ポートフォリオシート記述調査、聞き取り調査である。ただし、質問紙調査のデータ及びポートフォリオシート記述調査は、筆者が担当するクラス生徒に限り、聞き取り調査は全クラスの授業担当教員を対象とした。

5 授業実践

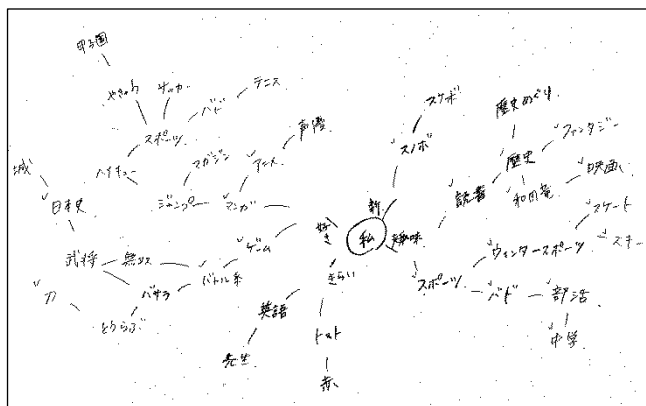
観点を取り入れた授業実践の代表例を以下に示す。

①職業適性の認識

「マインドマップ 自己紹介文」(資料1, 資料2) (ユニットI 自己を知る)

マインドマップ手法を用いて、自己紹介文を作成した。マインドマップとは、紙の中心に主題を書き、そこから連想する単語をつないで書いていく手法である。今回は、私を中心にして、好き・嫌い・趣味・新しくやりたいことの4つの枝から自分の好みや志向に関して思いつくものを、あまり深く考えずにどんどん記述させた。その後、枝が伸びたものを自己紹介する形式で文章化させた。本授業でのねらいは、自分の好みや志向を可視化することである。マインドマップに思いつく単語をどんどん書くことによって、自分では意識していない好みや志向が表出される。そして、その単語をつなぎ合わせた自己紹介文を作成することによって、自分がどのような人物であるかを改めて認識しようとするものである。

生徒Aのマインドマップ及び自己紹介文記述を以下に示す。



資料1 マインドマップ記述例(生徒A)

自己紹介文の例(生徒A)

趣味は、読書とスポーツをすることです。読書について、ジャンルは色々ありますが、特に読むジャンルは歴史ファンタジーが多いです。好きな作家さんは和田さんで、映画も見に行ったり、戦闘シーンの描写がすごく好きです。スポーツについて、中学の時は部活でバドミントンをやっていました。ウィンタースポーツが好きでスキーとスケートが得意です。しかし、スノーボードはまだやったことがないので、今年の冬挑戦したいです。

好きなものはゲーム、漫画、アニメです。全てに共通するものは、ジャンルにはバトル系が多いということです。ゲームがきっかけで歴史が好きになり、城めぐり、歴史めぐりに出かけたり、友達と博物館に刀を見に行ったりします。

資料2 自己紹介文記述例(生徒A)

マインドマップの枝が特に伸びた部分の単語をつないで自己紹介文を記述することができていた。さらに生徒 A は、授業後のポートフォリオシートに以下のように記述していた。

ポートフォリオシート記述（生徒 A）

びっくりするほど、単語が出てきた。それで、紹介文が書きやすくなった。

また生徒 B は、この活動を通して以下のように授業後のポートフォリオシートに記述した。

ポートフォリオシート記述（生徒 B）

自分の事は自分が一番分かっていると思ったけど、自己紹介文を書いてみて、新しい自分を知ることができた。

マインドマップ及び自己紹介文記述を通して、自分でも意識していなかった好みや志向に気がつくことができています。

②勤労観・職業観の醸成

「地域の産業を調べる」（資料3）

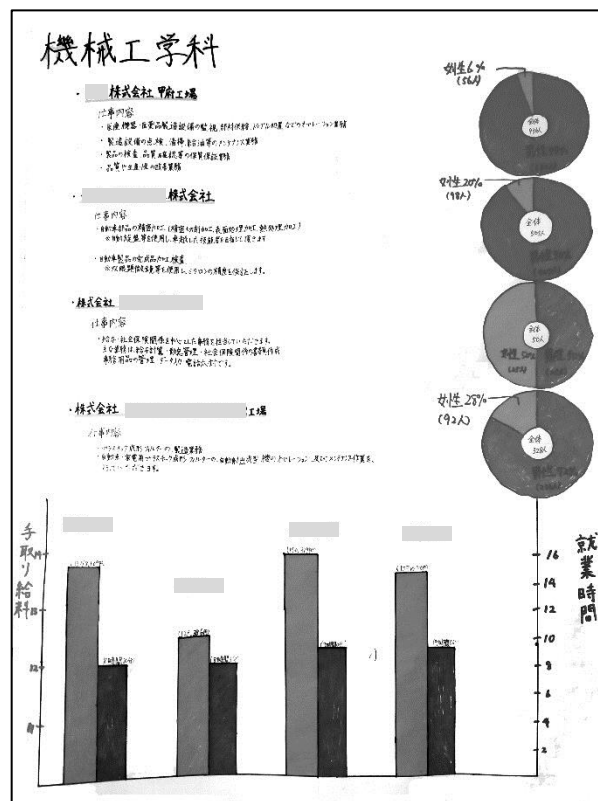
（ユニットⅢ 地域の産業を知る）

卒業生が就職した企業の求人票に記載された項目について、グループごとにデータを抜き出し、ポスターにまとめた。その後、自分のグループ以外のポスター評価を行った。グループは、現時点での希望学科で編成した。本授業のねらいは、地元企業の求人票を用いて調べる活動を通して、進路選択に向けた情報を得ること、調査方法や学び方を身につけること、他者を意識したポスター作成を行うことである。

作成したポスター例を以下に示す。

このグループでは、就業時間と手取り給料を比較した棒グラフと、就業者数の男女比の円グラフを作成した。気になった項目を他者に伝わりやすくするために、色分けの工夫や棒グラフの軸の入れ方もこだわって作成していた。さらにこのグループの生徒 C 及び生徒 D は、活動を通して以下のように授業後のポ

ートフォリオシートに記述した。



資料3 地域の産業を知るポスター作成例

ポートフォリオシート記述

（生徒 C）いいなと思った会社でも給料が少なかったり、人が多数抜けていたり、しっかり調べる大切さを知った。

（生徒 D）自分達とまとめ方が違って他の班のポスターを見てとても勉強になった。

情報を与えられるのではなく、自分で調べることの大切さに気づいているといえる。

6 結果と考察

（1）質問紙調査

プログラムの実施前と後では、生徒はどのように自分自身を認識しているのだろうか。このような問題意識の下で、質問紙調査を筆者が授業担当するクラスで実施した。質問項目は、質問①「自分が何に興味や関心があるのかわかっている」、質問②「仕事をするこの意味について自分なりの考えをもってい

る」，質問③「世の中には，様々な働き方や生き方があることを理解している」，質問④「将来の夢や目標が具体的になっている」という4つである．あてはまる・ややあてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらないの選択式で調査を行った．図3に実施前後の比較を示す．（サンプル数 27，回収率 100%）

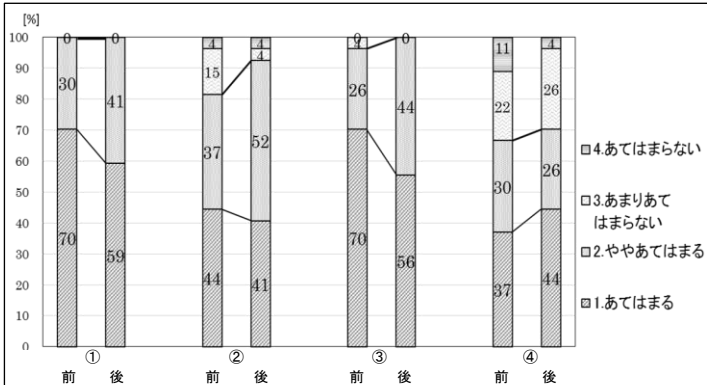


図3 質問紙調査結果(実践前後比較)

いずれの質問項目に対しても，あてはまる・ややあてはまるの総数は，実施前後において変化なし，もしくは上がっている．必ずしも本プログラムがこの結果を導いた要因の全てとは言えないものの，プログラムを通して，自己への認識や勤労観・職業観を養う一助となり得たのではないかと筆者は考える．

一方で，あてはまるの数は，質問①「自分が何に興味や関心があるのかわかっている」の回答は，70%から 59%へ，質問②「仕事をするものの意味について自分なりの考えをもっている」の回答は，44%から 41%へ，質問③「世の中には，様々な働き方や生き方があることを理解している」の回答は，70%から 56%に下がっている．

プログラムを通して様々な考え方や情報を得たことにより，自分の知らない世界が未だたくさん存在することを自覚しつつあり，その結果，実施前後で下がったのではないかと考えられる．この数値変化は，むしろ生徒の主体性を促すことができたと考える．限られた情報や経験の中で安易に進路選択を行っ

てしまうのではなく，高校在学中に，模索しながら選択していこうとしているポジティブな姿と捉えることができる．

(2) ポートフォリオシート記述

ポートフォリオシートは，生徒自身が学びの記録を集積し振り返ることと，授業者が生徒の学びを把握することを目的として使用した．使用したポートフォリオシートを図4に示す．

工業科1年 総合的な学習の時間			
1年()組()番 名前()			
月/日	単元名	今日の授業で一番大切だと思ったことを書いてください	各ユニットでの学び
✓	私マップ		自己を知る
✓	サインドマップ 自己紹介文		
✓	わたしののびのびな方		
✓	課題・進路を考える (初年度)		進路をイメージする
✓	課題・進路を考える (進路)		
✓	授業決定チェック		
✓	LINE PPG		地域の産業を知る
✓	インターンシップ 事前学習を覚える		
✓	産業を知る		
✓	山形の統計		地域に力をつける
✓	地域の産業を知る (卒業生の就職先)		
✓	地域の産業を知る (卒業生の就職先)		
✓	地域の産業を知る (卒業生の就職先)		インターンシップ事前学習を通して働くことを考える
✓	地域の産業を知る (卒業生の就職先)		
✓	これからの産業を 考える		
✓	働くとは		進路に向けて課題意識をもつ(新卒)
✓	就職について		
✓	人間に学ぶ		
✓	ビジネスマナー		進路に向けて課題意識をもつ(新卒)
✓	インターンシップで 何を学ぶのか		
✓	就職について		
✓	視点を広げる		進路に向けて課題意識をもつ(新卒)
✓	就職について		
✓	希望する進路につく には		
✓	ライフプランを立てる		

各ユニットが終了した時点で，ポートフォリオシートのユニットでの学びについて記述してもらった．生徒Aの記述例(ユニットIV)を以下に示す．なお，下線は，筆者が見取った観点に関する記述である．

生徒A: インターンシップの事前学習を通して，私は(g)将来働くときは正社員として入れるように頑張りたいし，入った後もみんなの立場を考えたり，そこでの見方も考えながら，(d)みんなと協力していきながら仕事をしていきたいと思った．今回習った(f)言葉遣いも面接などにしっかりと生かしていきたい．

このようにいくつかの観点に関わる記述

が含まれていた。これらユニットでの学びの記述を、6つの観点に分類し記述例とともに表3にまとめた。記述例は、各ユニットでねらった観点と特に関わりの深いものを示した。観点名の下にカッコ書きで示した数値は、各ユニットにおける観点に関わる記述の合計数である。

表3 ユニットにおける各観点に関する記述

観点	記述例
a.パーソナリティ ユニットⅠ(16) ユニットⅡ(16)	自分は相手中心で消極的だからたまには自分の意見なども言っていきたい(ユニットⅠ)。 就職で自分は何を重視しているのか考えることができました(ユニットⅡ)。
b.能力 ユニットⅣ(9)	もっと視点を変えていかないと社会に出て大変な事になると感じた(ユニットⅣ)。 その企業で働くためには何事にも挑戦する積極性と向上心をもつ必要がある(ユニットⅣ)。
c.多様な進路情報 ユニットⅡ(6) ユニットⅢ(24) ユニットⅣ(6)	最初は就職しか考えてなかったけど、進学の話聞いて進学もいいと思った(ユニットⅡ)。 仕事によって資格が必要なのかどうか、仕事内容を求人票などで知ることができた(ユニットⅢ)。
d.協働 ユニットⅢ(5) ユニットⅣ(10)	地域の産業をクラスの発表で知らない企業がたくさんあって知識が増えてよかった(ユニットⅢ)。 働くというのは、協力を絶対にせねばならない事だと思った(ユニットⅣ)。
e.コミュニケーション ユニットⅠ(5) ユニットⅣ(8)	豊かな人間関係を築く上で、まず相手のことを知る前に自分のことを知っていなければならないと思った。自分がどういう人間なのか分かった上でないと、相手に不快な思いをさせてしまう(ユニットⅠ)。 人にうまく言葉を伝えられる人になろうと思った(ユニットⅣ)。
f.一般常識・マナー ユニットⅣ(15)	あいさつや敬語に注意しようと思った(ユニットⅣ)。 マナーと礼儀正しさを意識したいです(ユニットⅣ)。
g.内発的意欲 ユニットⅡ(19) ユニットⅡ(11)	高校生活を楽しみながら勉強もしっかりして資格をとって将来ちゃんと働きたい(ユニットⅡ)。 自分の入りたい就職先に必要な知識、検定など学んでいきたい(ユニットⅢ)。

また表3には、新たに加えた観点「g.内発的意欲」がある。これは、生徒の記述を分類していく際、プログラム作成当初に意図していた観点に分類されないと判断したためである。

ポートフォリオシート記述から観点に関わる記述がみられ、ねらいに即した学びを表現できている様子が伺える。また、プログラム作成時に想定していなかった「g.内発的意欲」に関わる記述も新たにみられた。プログラムでの学びと自分の将来とを結び付けて思考しており、主体的な進路選択を促すことができていると推測される。

(3) 聞き取り調査

筆者以外の授業担当教員にも、プログラムを実施してもらい、終了後の感想を伺った。

(i) 勤労観・職業観に関わる内容

教師 A:

今回の総合的な学習の時間は、細かい部分の改善点はあるものの、主体的な進路選択を促す内容を実施できていたのではないかな。

特にユニットⅢ「地域の産業を知る」は、この地域や山梨にどういう仕事があると何となく知り、何となくビジョンが見えたところで、就職するためには何が必要なのか、と考えるきっかけとなったと感じる。結果的に3年生での進路選択に向けて、主体的に取り組むことにつながるのではないかな。その第一歩として、この回の教材を始め、一見まだ早いと思われる進路情報の提示はよかったと思う。これらをきっかけに、生徒が進路を逆算的に考えられるのではないかな。求人票等についてさらに詳しく読み込むことも必要かもしれないが、それは2・3年生になってからでもよい。

主体的な進路選択の一助として有効であったと考えられるものの、3年次の進路選択の際にどのような知識が必要となるのかを再度見直すことで、1年次にできることを精選できると考えられる。また1年次だけで終わってしまうものではなく、2・3年次につながる体系的な内容へと、さらに検討していくことが大切である。

(ii)協働に関わる内容
教師 B： グループ内で何もやらないような生徒を減らすために、役割を与えられるような内容に工夫するとよい。今回のような経験を繰り返し行うことで、協働や課題解決の力がつくと思う。工業科へ入学した生徒は、中学生の頃、グループでの傍観者の立場が多かったのではないかと感じている。ひとり一役与えられるような教材によって、自分もしゃべらなければグループに迷惑がかかると感じるができるのではないか。また、他のグループワークもそうだが、意見がまとまらず、もめたグループもあった。しかしそれがよかったと思う。自分の言いたいことがうまく伝わらなかったり、ひとりが主導権を握って進んでしまうグループがあったりして、そういう葛藤が垣間見れたことが、これからの自分の改善点を見つけるきっかけとなったのではないか。

個々の能力差や個性によって、グループで意見をまとめる作業に困難がある場合がある。グループメンバー構成を教師が工夫し、一人一役与えられる教材にする必要がある。このステップを繰り返し実施することによって、役割が与えられないような活動でも、個に偏らないグループワーク（協働）を実現していけると考える。

(iii)書くことに関わる内容
教師 A： 文章が書けないと感じた。しゃべると知識はすごくある生徒もいる。しかし文章に書けない。
教師 B： 自分の考えを書くプリントが多かったことにより、練習になったと思う。生徒は非常に書くことが苦手であるため、書く練習が必要だと感じている。
教師 C： ポートフォリオシートは記入する自由度がありすぎて、ほとんど書けない生徒がいた。自由度をなくして、単語を書けば文章になるような工夫があると書けるかもしれない。そして、プログラムの最後には、自由度があっても書けるように段階的にステップアップする工夫を行うことで、生徒の書くことへの苦手意識も軽減でき、振り返りとしてさらに意味あるものに位置づけられるかもしれない。

多くの生徒が書くことが苦手であると感じている。教師は、生徒が言葉そのものを知らないことや、言葉が含む様々な意味の理解不足、漢字の読み書きが不十分であることに

加え、自分の考えを順序立てて説明する力が不足していると感じている。文章を記入する際のワークシートのさらなる工夫が必要である。

(iv)課題解決力に関わる内容
教師 C： 本校工業科の生徒は、ルールをひいてあげないと進んでいけない生徒が多い。しかし、卒業後は教師がルールを引いてあげることができなくなる。高校3年間は教師がうまくルールを引いてあげて、ただし、ところどころ自分でルールを作らざるをえないやり方や、ルールを飛び出せるようなやり方をはさんでいくことは、本校のような学校のスタンスとしていいのではないか。1年生の時は、ルールはほぼつながっていてよいが、学年が上がるごとに、ルールの切れ幅を変えたり、切れた先に見えるルールの数がたくさんある状況を作っておいて、最終的に自分ひとりでルールを引けるようになっていければよいと思う。

自分で課題を見つける力、課題に対して解決策を見つける力が弱い生徒がいる。自由度がありすぎて生徒が乗ってこない等、教材によって改善点が多々ある。課題や解決策を見つけるための手法が身につくよう、段階的な教材や授業構成を提案し、時間をかけて丁寧に実施していくことが大切であると考え。

7 成果

今回の研究で得られた成果を以下に6点挙げる。

第1に「職業適性の認識」「勤労観・職業観の醸成」という観点でプログラムを実施したことにより、卒業後の進路を見据えた主体的な進路選択の一助になり得たと思われる。

第2に、現時点で自分がどのような性格でどのような価値観をもっているのか、認識しつつあることである。

第3に、生徒が自分のパーソナリティや能力を認識することが進路選択時や社会で生きていく上で大切であることに気づきはじめたことである。

第4に、専門学科に所属する生徒が卒業後の進路を考えるための基礎的情報を獲得できたことである。

第5に、社会に出たときに必要な力を知り、これからの高校生活で身につけようと目標をもてたことである。

第6に、獲得した情報から自分は何を選択するのか、学科選択をふまえて思考できたことである。

8 課題

授業実践後に残された課題を以下に6点挙げる。

第1に、授業1コマで実施する内容を精選する必要性である。生徒の実態に応じて、丁寧に時間をかけて進めるべき内容があった。

第2に、ねらいの伝え方の工夫である。ポートフォリオ記述において「よかった」「楽しかった」のような情意的なもののみがあった。自分の考えを文字に書いて表現することが苦手であることが原因と考えられるものの、生徒に授業のねらいが十分に伝わらないまま授業が終わってしまったため、授業の表面的な活動しか感じ取ることができなかったからではないかと考えられる。今日の授業は何のためにやっているのか、授業の中で繰り返し伝えながら進めていくなどの工夫が必要である。

第3に、進路に関する内発的動機付けをもたせた上で情報提供することの大切さである。生活する上で最低どの程度お金がかかるのか、働くとはどのくらい体力を必要とし休養を必要とするのかといった、生徒自身経験したことのないことへのイメージをもつ必要がある。イメージした上で、会社の給料や休暇等の情報を得ることで、自分事として捉えることができると思う。

第4に、書くことへの丁寧な指導である。自分の考えを書いて表現することが苦手な生徒に対して、段階的な教材を用いることが必要である。伝わる文章が書けるよう援助していく必要がある。

第5に、他教科や進路行事との横断的な内容への工夫である。同時期に専門学科の授業

や企業及び進学先の説明会などが実施されているため、それらを適宜振り返りながら、プログラムを進めていくことで、自分の進路をさらに多面的に思考することが可能となると考える。

第6に、教師が、生徒の進路への課題を見つける手助けを行いつつも、解決策を与えるのではなく、様々な角度からヒントを示すことの重要性である。卒業時には誰からヒントを与えられなくても、生徒自身で策を見いだせる、レールを敷ける人間になることが大切である。

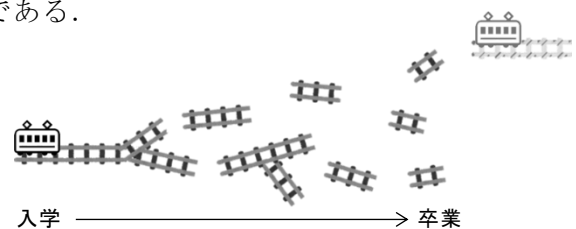


図5 主体的な進路選択の概念図

引用文献

- 一般社団法人雇用問題研究会. http://www.koyoerc.or.jp/school/assessment_tool.html. (2018.2.1.閲覧)
- 木村周. 2010. キャリアコンサルティング理論と実際. 一般社団法人雇用問題研究会.
- 厚生労働省. 2012. 中学校・高校におけるキャリア教育実践テキスト. p.86. 実業之日本社.
- 厚生労働省. キャリアコンサルティング. http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyo_u_roudou/shokugyounouryoku/career_formation/career_consulting/index.html. (2018.2.1.閲覧)
- 厚生労働省. 新規卒者の離職状況. <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137940.html>. (2018.2.1.閲覧)
- 国立教育政策研究所. 2014. 高等学校政策全般の検証に基づく高等学校に関する総合的研究. p.372.
- 西村宣幸. 2008. コピーしてすぐに使える ソーシャルスキルが身につくレクチャー&ワークシート. 学事出版.
- 星野欣生. 2007. 職場の人間関係づくりトレーニング. 金子書房.
- 森澤公美子. 2017. 専門学科における総合的な学習の時間を通じた進路探求について. pp.207-214.
- 文部科学省. 2009. 高等学校学習指導要領. 第4章総合的な学習の時間. p.351.
- 文部科学省. 2016. 教育課程部会高等学校部会（第5回）配付資料第4款生徒の発達を踏まえた指導.